

1. 本研究の目的と分析方針

病院内の患者向け図書室の設置数は、近年、患者を中心とした医療の推進を背景とした医療法の改正、病院機能評価の導入などにより、増加傾向にある。全国患者図書サービス連絡会によれば、2016年現在、全国に147の患者図書室の設置が確認されている¹⁾。また、こうした施設の設置体制を、形態別に以下の6つに分類する試みも見られるなど、患者向け図書室の整備が前進している様子も伺える²⁾。

- ① 独立型（病院内に患者専用図書室やコーナーを常設）
- ② 公開型（病院内の職員用医学図書室を公開、または一角を利用して図書コーナーを設置）
- ③ 併設型（職員用の医学図書室と同じスペースに患者図書室を設置）
- ④ 支援室併設型（相談支援室や、相談支援センターなどに、医学・医療図書や闘病記コーナーを設置）
- ⑤ 開設型（会議室・多目的ホールなど病院内の一定場所を借りて、日時を決めて図書コーナーを設置）
- ⑥ 巡回型（ブックトラックやワゴンに本を積んで病棟を巡回）

これまで、患者図書室にかんする事例報告や先行研究がある程度蓄積されてきている³⁾が、それらの多くは患者図書室の設置体制やサービス、運営体制の多様性を、アンケート調査などを中心に明らかにすることに主眼があった。また、こうした研究を踏まえ、近年の患者図書室の活動の広がりをつめるべく、従来の図書室内に限定された視点から病院内の一部署としての図書室という視点へと患者図書室の捉え方を拡張する試みも見られる⁴⁾。

桂らは、その研究において、調査の結果から

患者図書室が病院内で果たしている患者支援機能を、患者の知る権利の保障、患者が主体的に治療に参画することの支援、入院患者のQOL（quality of life：生活の質）に対する補償、退院後の患者のQOLの補償、患者同士の関係づくりの促進、外来患者の病院待ち時間の快適化という6点に整理している。

一方で、病院組織におけるこうした施設を、サービスの提供者である司書やスタッフがどのような場としてデザインしており、利用者はそうした場をいかに利用しているのかということ具体的に明らかにしようとする試みはなかった。本研究はそうした論点について、フィールドワークでの観察と司書、スタッフへのインタビューを基に探索的な検討を行う。

こうした論点は、先行研究が試みた病院組織における患者図書室という視点をさらに拡張する上で重要であり、そうした施設が病院組織において実際に果たしている役割を明らかにする上で意義がある。加えて、今後の患者図書室のあり方やサービスを考える一助となる可能性があるという点でも重要である。

2. 本研究の対象と調査

本研究は、ある大学病院における患者図書室を対象とする。調査期間は、2019年の6月から10月現在までの5ヶ月であるが、その後も継続的に実施しており、1回の調査時間は概ね3時間前後、現在の観察日数は20日である。

調査期間中、筆者は「患者図書室についての図書館・情報学に基づく研究」を行う調査者として調査対象となる患者図書室に滞在した。調査手法として、フィールドワークを通して患者図書室に来室する利用者の様子を観察し、フィールドノートを作成した。また、業務の空き時

間などを利用して司書やスタッフを対象に患者図書室の開設の目的やそれを果たすためにやっているデザインや工夫、患者図書室の利用についてインタビュー調査を行った。

3. 調査・分析結果

3.1 患者図書室とサービスのデザイン

「病院図書室」が医療従事者に医学情報を提供する専門図書室であるのに対し、「患者図書室」は、広く患者や家族、市民に対し医学情報を提供することにより、医療者と患者の情報の非対称性を緩和し、インフォームドコンセントを支援する場であるとされる⁵⁾。司書やスタッフはインタビューにおいてもこの点を施設の主要な設置目的として明確に述べていた。

このため、開室時間中には司書1名とボランティアスタッフ1名が常駐し、利用者へのレファレンスサービスを行っていた。また、司書は資料提供に際し、①患者や家族、市民を対象とした一般向けの医学書、②医学生や看護学生向けの教科書、③医師を対象とした専門書などを選書し、約1200冊の図書を用意することでそれぞれの患者のニーズに合った情報の提供をめざしていた。その他にも、DVDなどの視聴覚資料、患者や一般向けに作成された病気や服薬、患者会についての最新情報を載せたパンフレットやリーフレットを提供しており、インターネットに接続したパソコン、資料を複写するためのコピー機を利用に際しての注意書きとともに設置していた。

他方で、インタビューからは、調査対象となった患者図書室の設置理由として、患者にとっての癒しの空間を提供する目的があることが明らかとなった。こうした目的は、多くの患者図書室に共通しているとされる⁴⁾が、司書によれば、通常、医療施設である病院には入院患者や外来患者、家族が落ち着いて病気や治療のことを考えるための場所が存在しておらず、明る

い空間もない。したがって、患者や家族が病気を受け入れ、前向きに治療に励むことができるようになるための環境づくりも患者図書室の重要な役割となる。これを実現するために司書らは以下のようなデザインや工夫をしていた。

採光のための大きめの窓ガラスやロールブラインド、天井への埋め込み式のライト、病院内のタイルとは異なる木目調の床、くつろげるソファ、絵画や観葉植物、給茶機の設置、クラシック音楽の再生などである。また、資料が所蔵されている書棚、閲覧のためのテーブルや椅子は障がい者（車いすでの利用者など）の利用を想定して高さが調整されており、椅子にはステッキホルダーが設置されていた。その他にも、司書やスタッフは医療従事者と同様な服装をしない、資料閲覧のための拡大鏡やメモ用紙などが用意されている、検査のための受付番号を知らせるモニターが設置されているなど利用者への利用支援の工夫が観察できた。

3.2 患者図書室の利用

ここまで、司書やスタッフがどのような目的で患者図書室を設置し、サービスの実現のためにどのようなデザインや工夫をしているのかを示した。では、こうした場を利用者は実際にどのように利用しているのか、その利用方法に注目してフィールドノートの記録とインタビューの結果を基に分析を行う。

患者図書室は、その病院内における位置が、利用の際の重要な側面となる。調査対象となった図書室は、複数ある病棟のひとつの3階に位置しており、必ずしも利用者が手軽にアクセスできる場所ではなかった。そのため、この図書室では、利用促進のため、入院患者用の病棟掲示板や外来受付、外来患者用の掲示板に利用案内を設置するなどの試みが行われていた。利用者は、1日に10から30名、平均で15、6名程度であり、午前中の利用者は外来患者、午後

の利用者は入院患者が中心となっていた。

3.2.1 資料の利用

外来患者は、自らの病気について調べるために来室していたが、資料の利用には以下の方法が見られた。ある外来患者は、来室するとすぐに特定の病気の本やパンフレットが配置されている書棚に向かい資料を利用していた。こうした利用からは、患者がすでに何が自身にとって必要な医学情報かを理解していたことが伺える。司書へのインタビューからも、こうした利用が以前に比較して多く見られることが確認できており、近年の患者の医療・健康リテラシーが変化してきている可能性が考えられる。

一方で、来室時に資料を利用する際、司書に対し入手したい医学情報について問い合わせる患者も見られた。インタビューから得られた事例では、ある難病についての医学情報を求めて来室した外来患者が、司書にレファレンスサービスを求めている。この場合、難病に関する情報を得ることは、難病について利用可能な医学資料がそもそも少なく、利用者が自身に必要な情報を得ることが容易ではなかったことが考えられる。このほかに、患者の家族による病気の情報収集のための利用や、近隣の介護職従事者による業務の参考情報へのアクセスのための利用もあることが分かった。

他方で、入院患者には療養中、自身の病気を知るために特定の病気の資料を閲覧する、退院後の生活を理解し、家族に療養内容を説明するために食事や栄養、生活習慣病にかんする資料を閲覧、コピーするという利用が見られた。入院患者にも自身で資料を探すケースと司書に問い合わせるケースとの双方があった。前者のケースでは、入院中であることから自身の病気や予後について、医師などの説明からすでにある程度の理解を得ていたと思われるが、その理解を基に資料を探していたとすれば、患者自身

の医療・健康リテラシーの変化が関係している可能性がある。他方で、後者のケースには、ある治療薬の投与を受けた後、その副作用を気にかけて来室した入院患者が見られたが、副作用が多岐にわたる可能性がある治療薬を使用していたために、司書のサポートを頼りに的確な情報を得ようとしていたものと考えられる。

この患者図書室には、当該病院で医療業務に当たる医師や看護師、コメディカルワーカーなどの医療従事者による利用も見られた。調査中に観察できた限りでは、診療ガイドラインを確認するために来室した小児科の医師、患者への説明のための資料となるパンフレットを取りに来室した看護師、病気の知識を確認したり患者への説明をしたりするために資料を利用しに来室した実習中の看護学生が図書室を利用していた。これに加えて、室内のパソコンを利用して医療知識の検索を行う医療従事者の存在も確認できた。

こうした利用の理由としては、患者図書室が患者や家族向けの医学資料を提供していることが重要な理由と考えられる。医療従事者が一般に利用する医学図書館は、専門的な医学情報の提供を、医療従事者向けに行うことを意図しており、そうした資料を得るには必ずしも適していない。そのため、こうした施設の存在を知る医療従事者は、業務中の必要に応じて、図書室を患者への説明のための資料や情報を入手する場として利用していたものと考えられる。

この意味で、医療従事者による利用は、患者図書室が病院組織にあることと密接な関係にあるといえる。また、知識の確認のための利用は、この図書室が患者や家族向けの一般的な医学書に加え、医学生や看護学生向けの教科書や診療ガイドラインなどの医師を対象とした専門書なども選書していることにより可能になっているといえる。

3.2.2 その他の利用

図書室には、室内の給茶機を利用して服薬をする利用者や検査待ちで来室した患者も見られた。また、図書室がある病棟のフロアには、不妊治療を行う診療科が存在しており、子ども連れの患者が診療を待つ間に利用していたが、室内には、子ども連れの利用に際しての配慮を促す掲示がなされていた。

一方で、調査中には、初めて来室したと思われる入院患者がその後継続的に来室し、室内の資料を読む、持参した教材で自習するなど療養中の利用が確認できた。インタビューによれば、調査中に来室していたこのような患者の一部は、別の病棟から来室している精神科の入院患者であり、退院に備えて社会生活を再開するために医師の許可の下、リハビリの一助となる場として図書室を利用していた。こうした利用の例は、過去に同様の目的の下に担当医師の指示を受け、図書室でボランティア活動を行っていた患者がいたというインタビューの結果からも裏付けられる。「病院内は安全で守られている」という司書らのことばに象徴されるように、このような患者図書室の利用は、まさにこうした施設が病院組織の中に存在していることによって可能になっているといえる。

4. 考察と結論

以上に見てきたように、調査対象となった患者図書室は、外来患者や患者の家族、近隣の市民や入院患者に加え、病棟で医療業務を行う医療従事者によっても利用されており、資料の利用やその方法に多様性が見られることが明らかとなった。また、患者や家族の利用についても、先行研究によって整理された患者支援機能の枠組みに必ずしも当てはまらない患者図書室が果たし得る潜在的な役割が見出された。

このような多様な利用方法は、図書室がまさに病院組織の中に位置付けられていることに

よって可能になっているといえる。こうした視点は、患者図書室が病院組織内に存在することによって実際に果たしている役割を考慮する上で示唆的であり、本研究で取り上げたような具体的な事例の構造を参照することは、患者図書室が今後どのようなサービスを行う施設として病院内に位置付けられ得るのかということを考える上でも重要であると考えられる。

一方で、本研究はサービスの提供者である司書やスタッフがどのような専門的な技能や運営の工夫を通して医学資料や医学情報の提供を行っているのか、そのようなサービスの実現のために院内連携を通じてどのような取り組みを行っているのかなどを具体的に検討することができなかった。今後は、上記の論点について明らかにする必要があると考える。

【注・引用文献】

- 1 全国患者図書サービス連絡会. “全国の患者図書室リスト, http://kanjatosho.jp/the_list.html, (参照 2019-10-21)
- 2 日本医学図書館協会医療・健康情報ワーキンググループ編著. やってみよう図書館での医療・健康情報サービス. 第3版, 日本医学図書館協会, 2017, 191p.
- 3 例えば以下のような研究がある。菊池佑『病院患者図書館：患者・市民に教育・文化・医療情報を提供』出版ニュース社, 2001, 366p. 有田由美子ほか. 特集, 図書館における医療・健康情報の提供. 病院における患者・家族への医学・医療情報提供の現状. 現代の図書館. 2005, Vol. 43, No. 4, p. 199-207.
- 4 桂まに子ほか. “患者支援機能から見た患者図書室の多様性”. 2018年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集. 2018, 43-46.
- 5 山口直比古「病院の図書室：病院図書室と患者図書室、そしてその先へ」『情報の科学と技術』Vol. 66, No. 9, 2016, p. 467-472.